南スーダンのことば遊び
—「ルドリング」の類型論への視点— [1]

仲尾周一郎

1　はじめに

特定の言語の聴覚的印象を規則的な音韻的操作によってカモフラージュさせる類の「ことば遊び」または「秘密語」は数多くの言語において観察されている [2]。こうした言語現象は、社会言語学的関心はもとより音韻理論に示唆を与えるテーマとしての地位を獲得しており、音韻論的な類型化に向けた試みが行われている。また、「ことば遊び」や「秘密語」は術語として漠然としていることから、このような言語現象は Laycock (1972) により便宜的に「ルドリング (ludling)」[3] と名付けられている。

本稿は 2012 年時点で南スーダン共和国の首都ジュバに住む 10 代のジュバ・アラビア語 [4] 話者に流行しているルドリングについて記述し、ルドリングの類型論を検討する材料を提供することを目的としている。まず 2 節では、ジュバ・アラビア語ルドリングの構造を記述し、特に興味深いプロソディの振る舞いについて分析する。3 節では、ルドリングに関する音韻類型論を概観し、ジュバ・アラビア語ルドリングの視点からどのように評価できるかを述べる。4 節では、2 節で扱ったものとは異なる、ジュバ・アラビア語ルドリングの別変種について記述し、これら 2 種のルドリングは使用者である小学生世代のディアスポラ経験を背景として伝播した可能性があること、またアラビア半島のルドリングとも歴史的関係があるであろうことを述べる。さらに、南北スーダンでこれまで記録されてきた「秘密語」を紹介し、これらもルドリング研究の対象に含めることで、より興味深い示唆が得られることを述べる。

[1] 本稿は JSPS 特別研究員奨励費 (23·6924) の助成を受け、筆者が 2012 年 8–9 月に南スーダン・ジュバにおいて行った調査に基づく。なお、この調査ではジュバ・マラカル地区のマヨ女子小学校 (Mayo Girls) 所属の複数の女子児童の協力を得て、ルドリングによる自由談話、または文を単位とする発話のルドリング形式への自由翻訳を収集するという方法をとった。特に調査に協力して頂いた Winny Yenu 嬢、および本稿執筆に際して多くのコメントを頂いた稲垣和也氏には記して感謝の意を表する。

[2] 日本語ではこれまでに「ズージャ語」 (ジャズ → ズージャ、メシ → シーメ)、「ノサ語」(わたし → わノサたし)、「ばびぶべぼ遊び／バビ語」(わたし → わバたバしビ) などが知られている。

[3] ラテン語 *ludus*「遊び」と *lingua* 「言語」からの造語。なお、その他の先行研究では language disguise, speech disguise, word game, play language, secret language などの名称も使用されているが、本稿では「ルドリング」を採る。また、ルドリングに現れる無意味形態素 (crypteme) は「ルドリング素」と呼ぶ。

[4] スーダン・アラビア語などを語彙供給言語として発生した、いわゆる「クレオール」。その他にも、いくつかのクレオールにはルドリングが報告されている (例えばパプアニューギニアのトク・ピシン、スリナムのサラマッカン, cf. Bagemihl 1989)。

2　ジュバ・アラビア語ルドリング

2.1　基本的な構造

本節では導入として、ジュバ・アラビア語ルドリングの構造について記述する。このルドリングはジュバ・アラビア語で *rondók* ~ *rundúk* (4.2 節参照) や *rutân*「民族語」と呼ばれ、小学校教師や両親などの年長者に対して 10 代児童が友人間の発話内容を隠蔽する機能を持つ。大まかには、このルドリングはジュバ・アラビア語[5]の発話を入力形式として、各語彙中の音節核母音の直後に子音連続 *-ŋg-* または *-rb-* を挿入し、その直後に核母音と同じ母音を続けるという構造をもつ (補助記号で表しているプロソディについては後述する)。

(1)	入力		出力 (*-ng-* 型)	出力 (*-rb-* 型)	
	ána	→	*á**ŋg**ána*	*á**rb**ána*	「1SG」
	munú	→	*mu**ŋgu**nú*	*mu**rbu**nú*	「誰」
	dêr	→	*dé**ŋgê**r*	*dé**rbê**r*	「欲しい」
	wónusu	→	*wó**ŋgó**nusu*	*wó**rbó**nusu*	「話す」
	kátifu	→	*ká**ŋgá**ti**ŋgi**fu*	*ká**rbá**ti**rbi**fu*	「書く」
	giyáfa	→	*gi**ŋgi**yá**ŋgá**fa*	*gi**rbi**yá**rbá**fa*	「美しい」
	kebîr	→	*ke**ŋge**bí**ŋgî**r*	*ke**rbe**bí**rbî**r*	「大きい」

ルドリング素 *-ŋgV-* または *-rbV-* は一発話中において共起せず、以下の例が示すように、いずれのルドリング素が用いられるかは「われ曰く (*ána galí*)[6]」という意味を持つ、儀礼的な発話初頭のフレーズにおいて明示される。

(2)	*ána*	*galí,*	*râs*	*táki*	*kebîr.*	入力
	*á**rb**ána*	*ga**rba**lí,*	*rá**rbâ**s*	*tá**rbá**ki*	*ke**rbe**bí**rbî**r.*	出力 (*-rbV-* 型)
	*á**ŋgá**na*	*ga**ŋga**lí,*	*rá**ŋgâ**s*	*tá**ŋgá**ki*	*ke**ŋge**bí**ŋgî**r.*	出力 (*-ŋgV-* 型)
	1SG	COMP	頭	2SG.POSS	大きい	

「(われ曰く)、君の頭は大きい」

その他に注目すべきジュバ・アラビア語ルドリングの特徴として、ルドリング形式における自由変異の存在とプロソディの振る舞いがある。以下の節ではそれぞれの現象を記述し、問題点について述べる。

[5] ジュバ・アラビア語には基層話体・中層話体 (仲尾 2012) や世代方言 (仲尾 2011)、民族方言などの変種が存在する。ここで扱うルドリングはジュバ生え抜きの 10 代が話す基層話体を基底にしている。ハルツーム生まれの中層話体話者のルドリングについては 4 節において紹介する。

[6] ジュバ・アラビア語では引用節標識 (*galí* など) の主要部である発話動詞 (「言う」等) は省略できる。

2.2　自由変異

1 語中のルドリング素の挿入される位置と回数に関しては、2 種類の自由変異が観察できる。まず、(3) のように、多拍語 (多音節または CVC) を入力とする場合、語頭音節の核母音直後への挿入は義務的であるが、その他の核母音直後に関しては随意的なようである [7]。また、(4) のように一拍語 (CV) に関しては、例外 [8] を除きルドリング化は随意的である。

(3)	*ásuma*	→	*á**ŋgá**suma*	~	*á**ŋgá**su**ŋgu**ma*	
			*á**rbá**suma*	~	*á**rbá**su**rbu**ma*	「聞く」
	íta	→	*í**ŋgí**ta*	~	*í**ŋgí**ta**ŋga***	
			*í**rbí**ta*	~	*í**rbí**ta**rba***	「2SG」
	sunú	→	*su**ŋgu**nú*	~	*su**ŋgu**nú**ŋgú***	「何」
	silâ	→	*si**ŋgi**lâ*	~	*si**ŋgi**lá**ŋgâ***	「武器」
	wónusu	→	*wó**ŋgó**nusu*	~	*wó**ŋgó**nu**ŋgu**su*	「話す」
	isténe	→	*i**ŋgi**sténe*	~	*i**ŋgi**sté**ŋgé**ne*	「待つ」
	kátifu	→	*ká**ŋgá**ti**ŋgi**fu*	~	*ká**ŋgá**tifu**ŋgu***	「書く」
	beyîd	→	*be**rbe**yîd*	~	*be**rbe**yí**rbî**d*	「遠い」
	súkuran	→	*sú**rbú**kuran*	~	*sú**rbú**ku**rbu**ran*	「ありがとう」
	lókílíŋ	→	*ló**ŋgó**kí**ŋgí**lí**ŋ*	~	*ló**ŋgó**kí**ŋgí**lí**ŋgí**ŋ*	「肘鉄砲」
	giyáfa	→	*gi**ŋgi**yáfa*	~	*gi**ŋgi**yá**ŋgá**fa*	「美しい」
	giyaf-în	→	*gi**ŋgi**yafí**ŋgî**n*	~	*gi**ŋgi**ya**ŋga**fí**ŋgî**n*	「美しい-PL」

(4)

íta	*bí*	*géni*	*wên?*
*í**rbí**ta*	*bí ~ bí**rbí***	*gé**rbé**ni*	*wé**rbê**n?*
2SG	TAM	住む	どこ

「君はどこに住んでいるの？」

ána	*kedé*	*jíbu*	*le*	*íta*	*móyo?*
*á**rbá**na*	*ke**rbe**dé*	*jí**rbí**bu*	*le ~ le**rbe***	*í**rbí**ta*	*mó**rbó**yo?*
1SG	SUBJ	持ってくる	ALL	2SG	水

「私は君に水を持って来ようか？」

jíbu	*hája*	*dé*	*guwâm*
*jí**ŋgí**bu*	*há**ŋgá**ja*	*dé ~ dé**ŋgé***	*gu**ŋgu**wá**ŋgâ**m.*
持ってくる	もの	DEM	早く

「早くそれをもってこい」

[7] ただし、前節で述べた発話初頭のフレーズは固定化されており、自由変異は観察されない。
[8] ただし、一拍語 *já* → ***já**ŋgá***「来る」や *tô* → ***tó**ŋgô***「彼 (女) の」には自由変異は観察されない。

2.3　プロソディ

ジュバ・アラビア語におけるピッチは、基本的に高 (H: 鋭アクセント記号により標示) と低 (L: 無標示) の二項対立である。語末音節にのみ現れる下降 (F: 曲アクセント記号により標示) は H と L の複合とみなせる。しかし、これらの分布を観察すると、ジュバ・アラビア語は安易な一般化を許さない複雑なプロソディ体系をもつことがわかる。

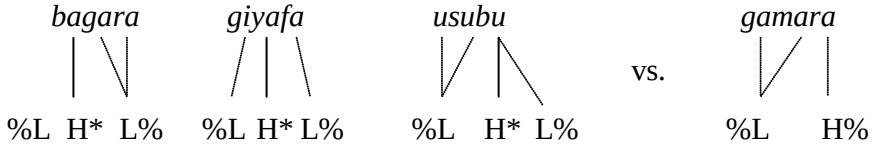
まず、ジュバ・アラビア語には、大部分のピッチ・アクセント型の語彙 (以下 PAW と略す) および形態論と、少数のトーン型の語彙 (以下 TW と略す) および形態論が存在する。PAW は主にアラビア語起源であり、(5) のように一音韻語に一音節のみが H または F をもつ自由アクセント (n 音節語に対し、n+1 パターンのアクセント型がある) と特徴づけられ、複数形接尾辞が付加される場合などは語幹の H または F が除去 (いわゆる de-accenting) される。一方、TW は主に民族語起源であり、(6) のように各音節に対し制限なく H や L (語末音節には F も) が現れ、複数形接尾辞には語幹末のピッチとは対極のピッチ (いわゆる polar tone) が現れる (F の場合は H)。

(5)　*bágara*「牛」、*giyáfa*「美しい」、*usubû*「週」、*gamará*「月」
　　***bá**gara* → ***ba**gar-ât*「牛-PL」、*giy**á**fa* → *giy**a**f-în*「美しい-PL」

(6)　*dáŋgá*「弓」、*kwete*「ローカルビール」、*tuútuút*「毒蟻」、*kapáparât*「蝶」
　　dáŋgá → *dáŋgá-**jin***「弓-PL」、*kwete* → *kwete-**jín***「ローカルビール-PL」

これらの形態音韻構造の違いは、PAW と TW が基底レベルで異なる表示をもつと分析することで説明できる。Nakao (in print) では、TW にはピッチの現れに制限がないことや、複数形接尾辞のピッチの現れを説明する必要から、基底で各音節に H や L が付与されている体系を想定した。一方で、PAW ではピッチ実現の制限から、日本語ピッチ・アクセント体系などをモデルとし、(5) *bágara, giyáfa, usubû* などは基底では卓立 (H*) の位置のみが指定され、後語彙的な境界トーン (%L [9] および L%) が付与されるいわゆる「有核語」、これに対し、語末音節に H をもつ (5) *gamará* などは卓立をもたず、後語彙的な境界トーン (%L および H%) が付与されるいわゆる「無核語」と分析した [10]。

(7)



[9] ただし、語頭音節に卓立がある場合 (e.g. *bágara*) 、%L は実現しない。

[10] その他の境界トーンには、疑問文末で現れる H% 等が認められうる (e.g. *bágara?* [ba˥ga˥ra˥]「牛か？」)。なお、この H% は TW にも付与されうる (e.g. *kwete?* [kweꜜteꜛ]「ローカルビールか？」)。

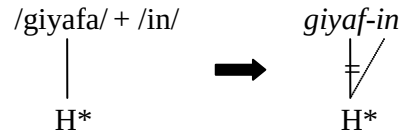
しかし、ルドリング形式においては以上の分析の枠にはあてはまらないプロソディ構造が観察できる。第一に、PAW と TW は基底が異なると考えられるにも関わらず、ルドリングでは特に区別なく、同一の規則が適用されている (e.g. (3) *giyáfa* → *gi**ŋgi**yá**ŋgá**fa*「美しい (PAW)」vs. *lókílíŋ* → *ló**ŋgó**kí**ŋgí**líŋ*「肘鉄砲 (TW)」)。次に、PAW は 1 音韻語に 1 音節のみ卓立をもつが [11]、ルドリング化された形式はこの制約に反する。さらに、Nakao (in print) の分析に従えば、語末音節の F (H* + L%) は卓立 (H*) のみがコピーされる (e.g. (3) *silâ* → *si**ŋgi**lá**ŋgâ*, **si**ŋgi**lâ**ŋgâ*, **si**ŋgi**lâ**ŋga***「武器」) が、語末音節の H (H%) は境界トーンがコピーされている (e.g. (3) *sunú* → *su**ŋgu**nú**ŋgú***, **su**ŋgu**nu**ŋgú***「何」) ことになる。

以上のような問題に対し、本稿では暫定的に、ルドリングの特殊な振る舞いは、それが独立した音韻派生段階をもつためと考える [12]。まず、(3) *giyaf-în* → *gi**ŋgi**ya**ŋga**fí**ŋgî**n*「美しい-PL」から、ルドリング化は PAW の語形成の後に行われていると考えられる。また Nakao (in print) を修正し、語末での H と F の対立は、(8) のように語ごとに語末に H* を持つ音節に L% の多重連結を許すか (語末 F, *usubû*)、許さないか (語末 H, *gamará*) の対立と分析し、これに基づきルドリング化は境界トーンの付与の前段階で生じていると一般化する。

(8)

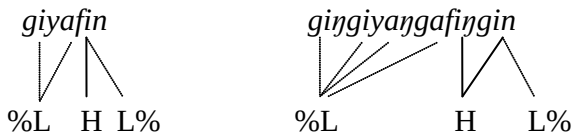
以上から、ルドリング化の規則順序付けは (9) のように図示できる。また、(9b) の段階では PAW と TW が区別されないと推定しておく [13]。

(9) a. 語形成に関わる形態音韻規則



b. ルドリングの形態音韻規則

c. 境界トーンの付与



[11] ただし、動詞重複形 (動詞は全て PAW) では *séregu*「盗む」→ *sérégú-seregu*「盗みまくる (多回数)」のようなプロソディ実現が観察されており、PAW の音韻語の規定自体に課題がないわけではない。

[12] これに似た分析として、Begemihl (1995) や Vaux (2012) はルドリングを類型化するパラメータして音韻規則の順序付けを認めており、本稿での分析はこの枠組みに組み込むこともできる。

[13] TW にも境界トーンが付与される (cf. 註 10) ことは、この推定を支持している。

3　ルドリングの音韻類型論

3.1　先行研究

ルドリングに関しては、音韻形式ごとの類型化が試みられてきた。初期の研究として、Laycock (1972) は拡大型 (入力外の分節音を追加)、縮小型 (入力内の分節音を削除)、置き換え型 (入力内の分節音を入力外の別の分節音に)、並び替え型 (入力内の複数の分節音の音位転換)、複合型 (以上の組み合わせ) の 5 類型を提示している [14]。

ところで、ルドリング素が 1 語中に反復的に現れ、その形式において入力形式内の分節音 (特に母音) がコピーされるタイプのルドリング (以下「反復コピー型」) については、Laycock (1972) は拡大型のサブグループとするが、いくつかの先行研究は観察的に (10) の傾向や特徴を提示し、特殊な類型とみなして音韻論的解釈を行っている。

(10) a. ルドリング素は入力の音節に対し後方に現れる (McCarthy 1991, Yu 2008, etc.)
例外：ブラジル・ポルトガル語 *bola* → ***po**bo**pa**la* (Guimarães & N. 2012, Yu 2008)

b. 子音はコピーされにくい (Botne & Davis 2000, Frazier & K. 2011)
例外：スウェーデン語 *bra* → ***bo**b**ro**ra* (Botne & Davis 2000)

c. 挿入される形式は唇子音が多い (Botne & Davis 2000, Frazier & K. 2011)
例外：インドネシア語 *kita* → *ki**deni**ta**dena*** (Botne & Davis 2000)
ドイツ語 *erschlug* → *er**herlefer**schlug**huglefug*** (Yu 2008)

d. 出力形式が特徴な韻律構造をもつことがある (Yu 2008, Frazier & K. 2011)
例：ハウサ語 *mùstáfà* → *(mú**bùs**)(tá**bà**)fá, búuláalàa* → *(bù**gùdù**)(lá**gádá**)làa*
タガログ語 *salá:mat* → *(sa**gá:**)(la**gá:**)(ma**gá**t), hindíq* → *(hi**gí:di**n)(di**gí:di**q)*

e. 表層表示が入力形式となりやすい (Guimarães & N. 2012, Frazier & K. 2011, etc)
例：ブラジル・ポルトガル語 /kamiza/ [kẽmiza] ($V_{[+stress]}$ →[+nasal]/__$C_{[+nasal]}$)
→ [kẽ**pẽ**mi**pi**za**pa**] (語頭音節の核母音が、非鼻子音の前にも関わらず鼻母音化)

McCarthy (1991) は自律分節音韻論に則り、母音のコピーは分節音の拡張と捉えて (10a) の傾向を説明している。しかし、前方への拡張か後方への拡張かは恣意的に決定せざるをえず、(10b, c) の傾向も説明できない (Botne & Davis 2000)、また、(10c) のドイツ語の例外のようにライムがコピーされる場合、各分節音をそれぞれコピーする必要があり、ライムのまとまりを表現できない (Yu 2008)、などの問題点が指摘されている。

Botne & Davis (2000) は反復コピー型ルドリングを「半音節 (demisyllable)」の間に子音的調音が付課 (impose) された特殊な類型とみており、唇子音はその長音に必要な可動器官が唇のみであり、母音の調音に必要な舌の動作への影響を最小化できるため最も挿入されやすいと分析している。この分析は (10a, b, c, e) の特徴を説明できるが、極めて特殊な音韻規則を建てるにも関わらず (10b, c) の例外が処理できない (Frazier & Kirchner 2011, Vaux 2012)。

[14] Bagemihl (1995) や Frazier & Kirchner (2011) はこのほかにもマイナーな類型があることを述べている。

最適性理論を用いた最近年の代表的な分析には、以下の 3 種類がある。

Yu (2008) は (8d) の特徴を最重視し、入力形式の各音節に対する韻律構造を単位とするテンプレートの形成 (FOOTBINALITY) がより強い制約としてランク付けられ、このテンプレートの要請から二次的に母音がコピーされると分析する。Yu (2008) は入力形式としてはおそらく基底表示のみを扱っており、(8e) の特徴に関しては注目していない。

Guimarães & Nevins (2012) はブラジル・ポルトガル語ルドリングにおいて (8d) の特徴を指摘し、Raimy (2000) による重複音韻論による制約 (Base-Reduplicant Correspondence, IDENT-BR) との類似から、重複と並行的に、出力形式は基底表示との照合性制約 (IDENT-IO) よりも表層表示との照合性制約 (IDENT-BR) がより高い位置にランクづけられると分析する。ただし、ルドリング素の反復性と出力形式の韻律構造については説明していない (Yu 2008)。

Frazier & Kirchner (2011) は Guimarães & Nevins (2012) とは独立に、ティグリニャ語ルドリングなどにおける (8d) の特徴を指摘し、基底表示との照合性制約 (IDENT-IO) より表層表示との照合性制約 (IDENT-NL) が高い位置にランクされ、Yu (2008) と同様に韻律構造を単位とするテンプレート (FOOTBINALITY) からの要請で母音がコピーされると分析している。

3.2　ジュバ・アラビア語ルドリングからの検討

ジュバ・アラビア語ルドリングから以上の分析を評価すると、まず (10a, b) は満たすが (10c) に関しては例外であることがわかる。ここでは Botne & Davis (2000) の分析では、なぜ子音連続 *-rb-* や *-ŋg-* が選択されたかについては説明できないことを指摘しておく。

(10d) についても、多拍語がルドリング素の挿入に関して自由変異をもつ点 (cf. 2.2 節) を考慮すれば例外と認めたほうがよい。つまり、ジュバ・アラビア語ルドリングの事例は、韻律構造と母音のコピーに依存関係を認めるという分析 (Yu 2008, Frazier & Kirchner 2011) では、必ずしもルドリング素が反復しないという型のルドリングを扱えないという問題を端的に示している [15]。より包括的な視点としては、Laycock (1972) を参考に、反復コピー型ルドリングはある種の「複合型」とみることが妥当であろう。また、(10e) に関し、ジュバ・アラビア語ルドリングは、その音韻派生段階は表層と基底の中間とみなせる (cf. 2.3) ため、この傾向に対しても例外といえる。このことは、「ルドリングでは表層表示との照合性制約がより高い位置にランク付けられる」という説明 (Guimarães & Nevins 2012, Frazier & Kirchner 2011) では不十分であり、いずれの音韻派生段階でルドリング化が生じるかが類型化のパラメータとなりうることを示唆している (cf. 註 12)。

加えて、従来のルドリング類型論は言語普遍性を前提としており、ルドリングに関する通時的な考察は十分行われていないことが指摘できる。次節では、ジュバ・アラビア語ルドリングの事例がルドリング類型論に通時的視点を提供できることについて述べる。

[15] なお、Yu (2008) は (10d) のハウサ語の例について語末音節を「韻律外」と分析できることを述べている。しかし、特に語中の音節 (太字) がルドリング素を持たない例 (3) *giŋgi**ya**fíŋgîn, káŋgá**ti**fuŋgu* などは、韻律外性では説明できない点にも留意したい。

4　ルドリング類型論への社会言語学的視点

4.1　ジュバ・アラビア語ルドリングの変種

スーダン・アラビア語との言語接触の結果、ジュバ・アラビア語には部分的に脱クレオール化が生じており、基層話体 (より伝統的なクレオール変種) と中層話体 (目標言語の影響を受けたクレオール変種) が区別できる。中層話体は動詞の主語人称活用や接尾人称代名詞などを獲得していることで特徴づけられる (仲尾 2011, 2012)。

さて、これまでジュバ・アラビア語ルドリングとしてきたものはジュバ生え抜きの話者が使用するものであったが、ハルツーム生まれのジュバ・アラビア語中層話体話者は規則が異なるルドリング変種を使用している。後者のルドリング変種は、ルドリング素は卓立を持つ音節 (C)**V́**(C) のみを(C)**V́V́rbV́**(C) のテンプレートへと組み込むという構造をもつ。

(11)	*íta*	*t-áruf*		*t-éktib?*	入力：中層話体
	***íírbí**ta*	***tá**árbá**ruf*		***té**érbé**ktib?*	出力：ハルツーム型
	2SG	2SG-知っている. IMPF		2SG-書く.IMPF	
	íta	*bi*	*áruf*	*katífa?*	入力：基層話体
	***í**rbí**ta*	*bi*	***á**rbá**ruf*	*ka**rba**tí**rbí**fa?*	出力：ジュバ型
	2SG	TAM	知っている	書く.GER	

「あなたは書けますか」

(12)	*ísm-ak*	*munú?*	入力：中層話体
	***íírbí**smak*	*mun**úúrbú**?*	出力：ハルツーム型
	名前-2SG.M.POSS	誰	
	ísim	*táki*	*munú?*	入力：基層話体
	***í**rbí**sim*	*tá**rbá**ki*	*mu**rbu**nú?*	出力：ジュバ型
	名前	2SG.POSS	誰	

「あなたの名前は何ですか」

(13)	*ána*	*galí,*	*rás-ik*		*kebîr.*	入力：中層話体
	***áárbá**na*	*gal**íírbí**,*	*r**áárbá**sik*		*keb**íírbî**r.*	出力：ハルツーム型
	1SG	COMP	頭-2SG.F.POSS		大きい	
	ána	*galí,*	*râs*	*táki*	*kebîr.*	入力：基層話体
	***á**rbá**na*	*ga**rba**lí,*	*rá**rbâ**s*	*tá**rbá**ki*	*ke**rbe**bí**rbî**r.*	出力：ジュバ型
	1SG	COMP	頭	2SG.POSS	大きい	

「あなたの頭は大きい」

なお、以下の例が示すように、ハルツーム型ルドリングは中層話体のみならず基層話体を入力とすることもできることから、これらのルドリング変種の規則は言語変種の文法からの要請の帰結としてみることはできない。

(14)	*ána*	*bí*	*géni*	*fi*	*hai-melekân*	入力：基層話体
	***áárbá**na*	*bí*	***géérbé**ni*	*fi*	*hai-melek**áárbâ**n.*	出力：ハルツーム型
	***árbá**na*	*bí**rbí***	*gé**rbé**ni*	*fi*	*ha**rba**i-me**rbe**lekár**bâ**n.*	出力：ジュバ型
	1SG	TAM	住む	LOC	地区-マラカル (地名)	

「私はマラカル地区に住んでいます」

近年のジュバでは、2005 年の包括的和平条約締結そして 2011 年の南スーダン独立以降、ハルツームなどのディアスポラからの帰還民が急激かつ一方向的に増加している。こうした人口移動の方向性を考慮すれば、ハルツーム型ルドリングが先行的に存在し、ジュバへと伝播したと推定するのが自然である [16]。

この推定と関連して、ハルツーム型ルドリングと極めて類似したルドリングがアラビア半島周辺のアラビア語変種において報告されている点は興味深い。Bakalla (2002) は 1950–60 年代のメッカで流行した *misf* と呼ばれるルドリングを記録している。このルドリングでは、入力形式の卓立 (ストレス) をもつ音節 ˈC**V**(**V**C) のみが、C**VVr**ˈ**bV**(**V**C) というテンプレートに組み込まれるという構造をもつ。

(15)	*ˈhaada*	*ˈšayy*	*ja ˈmiil*
	*h**aar** ˈ**baa**da*	*š**aar** ˈ**ba**yy*	*jam**iir** ˈ**bii**l*
	この	もの	良い

「これは良いものだ」

ta ˈʕaalu	*ˈkulla-kum*	*ˈhina*
*taʕ**aar** ˈ**baa**lu*	*k**uur** ˈ**bu**llakum*	*h**iir** ˈ**bi**na*
来い	全て-2PL	ここ

「君たちみんなここに来い」

[16] 筆者が調査を行った小学校では、遊び歌にもこれと類似した現象が見られた。例えば、1 人が泣きまねをしている周りに円形に並んだ状態で以下のような歌 (括弧部分で呼ばれたメンバーが次に泣きまねをする役に回る) を歌うという、日本の「かごめかごめ」にやや類似した遊びがある。この歌にはエジプト・アラビア語と考えられるバージョン：*Selwā ya selwā, mālik bi-tebkī, āyiza ē, āyiza ṣadīqti, ṣadīqtik mīn, ṣadīqti (Winny).*「セルワーちゃん、セルワーちゃん、なぜ泣くの、何が欲しいの、私の友達が欲しいの、あなたの友達は誰、私の友達は (ウィニー) よ」と、ややジュバ・アラビア語の影響を受けたバージョン：*Selwā selwā, mālu bi dengir, hāzā ē, hāzā sadīqī, sadīqī munu, sadīqī filān, filān de munu, filān de (Inda).*「セルワーちゃん、セルワーちゃん、なぜ膝ついて座っているの、これは何、これは私の友達、私の友達はだれかよ、だれかはだれ、だれかは (インダ) よ」がある。このように南スーダン人子弟のディアスポラ経験を背景として言語文化の伝播が生じていたことは注目に値する。

Bakalla (2002) は 1950–60 年代のメッカにおいては、このルドリングは様々な言語 (ナジド・アラビア語、カイロ・アラビア語、英語、フランス語、タミル語、トルコ語、ベンガル語、ハウサ語、ペルシャ語、ウルドゥ語) において用いられていたことを報告し、イスラームの聖地かつ世界都市であったメッカの都市文化と位置づけている。

その他のアラビア語変種に関しても、Walter (2002) はイエメン・ハドラマウト地方で使用される、卓立を持つ音節の頭子音の直後に *-aarb-* を挿入するというルドリング (e.g. *muˈkalla* → *muˈk**aarb**alla*「ムカッラ (地名)」) を、Abu-Abbas et al. (2010) はヨルダンで 使用される、語頭音節の頭子音の直後に *-irb-* (入力の核母音が /a/ か/i/) または *-urb-* (入力の核母音が /u/) が挿入するというルドリング (e.g. *saˈlaam* → *s**irb**aˈlaam*「平和」、 *riˈmaal* → *r**irb**iˈmaal*「砂」、*ˈrukba* → *r**ur**ˈ**b**ukba*「膝」) を記録している。両研究はこの言語文化がメッカ巡礼により各地域に伝播、変容したものである可能性を提示している [17]。

Laycock (1972) はいくつかのルドリング間の類似に関して、それが言語普遍によるものか、偶然によるものか、それとも伝播によるものかを考察する価値について問題を提起している。以上のようなジュバ・アラビア語ルドリングを含むこれらの *-rb-* 型ルドリングは、ルドリング類型論に対して、通時的考察という、純粋な言語普遍性とは異なる立場からの説明が有効であることを示す事例と位置づけられる。

4.2 ルドリングの定義と南北スーダンの「秘密語」

Laycock (1972) はルドリングを「普通の言語のテクストを、そのメッセージの意味を変えずに、隠蔽または滑稽な効果を意図して形式を規則的に変形した帰結」と暫定的に定義している。この定義は、広義にいわれる「秘密語」や「スラング」などにおける予測不可能な語彙の置き換え (隠蔽を意図するが規則的でない)、裏声やささやき声、不明瞭な発話や、特定の音韻的特徴を用いた外国人訛りの真似 (規則的だが隠蔽を意図しない) などを排除する。また、この定義はルドリングをあくまで言語現象と捉えており、自律的な言語体系とみなしていない点も重要である [18]。

ジュバ・アラビア語ルドリングはこの定義に合致しているが、南北スーダンにおいてはこうした典型的なルドリングはほぼ報告されてこなかった。しかし、「若年層の秘密語」と呼ばれるある種の言語変種がこれまでに 2 種類記述されている。

まず、Miller (2004) は 1980 年代のジュバにおいて使用された「若年層の秘密語」を記録している。この言語変種では、1 発話中に接尾辞 *-efon* がある程度規則的にかつ語類に関わ

[17] ルドリングの伝播に関して、Vycichl (1959) はかつてエジプト南東部のアッバーディー人首長の話したルドリングとある種のペルシャ語ルドリングの類似が伝播に起因する可能性を指摘している。

[18] その他の定義もこの点では概ね一致しているようである (Bagemihl 1995, Vaux 2012, etc.)。ルドリングは、その使用目的から、ある種の「レジスター」や「スタイル」と見做し、限定的な場面でのみ出現する「言語変種」と認める観点もありうる。しかし、こうしたカテゴリーはいわゆる集団語やジャーゴンなどと同様に、自律的な言語体系をなしている (と記述言語学でみなされうる) 「方言」とは峻別する必要がある (cf. 千田 2010)。

らず付加されており、この言語現象のみを取り上げるのであればルドリングの定義に合致しうる。しかし、Miller (2004) は、やや不規則な接辞付加・短縮語化・借用・意味変化などによる秘密語語彙を含めた総体を「秘密語」として記述している [19]。

また、Manfredi (2008) は、スーダンの諸都市を中心に 1980–1990 年代以降に発生した、スーダン・アラビア語で *rendók* (*ruṭāna*「民族語」からの変形) と呼ばれる「若年層の秘密語」を記録している。こちらの「秘密語」では、スーダン・アラビア語を入力とし、一部の機能語を除いて語類に関わらず子音が音位転換するという規則 [20] をもっている。

(16)	*al-xawā[ʤ]-āt*	*ṣuɣār*	*lakín*	*rās-hum*	*b-i-kūn*	*kabīr.*
	al-ʤawāx-āt	***ɣurāṣ***	*lakín*	***sār-hum***	*b-i-**nūk***	***barīk.***
	DEF-西洋人-PL.F	小さい.PL	しかし	頭-3PL.M	IMPF-3SG.M-COP	大きい
	「西洋人は小さいが、頭は大きい」					

やはりこの言語現象自体はルドリングの定義に合致しうるが、Manfredi (2008) はその他のやや不規則な接辞付加・短縮語化・借用・意味変化などによる秘密語語彙 (上記の音位転換はこうした語彙に循環的に適用されうる) を *rendók* に含める。また、Manfredi (2008) は、一部の若年層コミュニティ (*Šammāsa*) において *rendók* [21] の使用場面が限定されておらず、「第一言語として使用されている」と報告している。

これらの事例をルドリングの定義に当てはまらないものとして分析対象から除外するのは容易いが、言語現象であるルドリングがより高度な言語コードへと発達しうることを示す端的な例とみることもできるだろう [22]。これまで、言語現象が (自律的な) 言語変種あるいは言語へ発展する現象は、ピジンからクレオール、コードスイッチングから混成言語 (mixed language) への発展モデル等によって提示されてきたが、これらと並行的に捉えることで、ルドリングは音韻論を超えたテーマとなる可能性がある。

[19] 仲尾 (2011) は、2010 年の調査に基づき 20 代前後のジュバ・アラビア語話者により使用される「スラング」の語彙やそれを形成する短縮語化・接辞付加などの形態論を記録した。Miller (2004) の記録したやや不規則な形態論や語彙は現在も変容しつつ広く使用されているのに対し、接尾辞 *-efon* の付加に関しては知識を持たない話者が多く、1980 年代当時の段階で異なるレベルの現象であった可能性がある。なお、現時点では仲尾 (2011) の「スラング」と本稿で扱ったルドリングは混合されず、異なる言語現象として存在している。

[20] 筆者の調査によれば、1970–1980 年代頃のジュバにおいても、Miller (2004) の「秘密語」とは別に、小学生はこれに類似したルドリング (***wúra*** < ***rúwa***「行く」、***ɩáabu*** < ***áɩabu***「遊ぶ」) を使用していたようである。Kenyon (2011) はスーダン中央部で行われる憑依儀礼において、憑依霊がスーダン・アラビア語の子音を入れ替えた「異言」(*rutana* [sic]) を話すと述べているが、具体例はない。南スーダンのザンデ語 (Evans-Pritchard 1954) や隣接のコンゴ北東部のマンベトゥ語 (Demolin 1991) では、音節単位の音位転換等による「スラング」や「秘密語」が報告されているが、恐らく *rendók* との関係性は薄い。

[21] なお、このコミュニティにおける *rendók* 変種は独自の接中辞的要素を発達させている (Manfredi 2008: 122, *ʤāmid* → *ʤa-**tta** **na**-mid*「良い」)。Manfredi (2008) は特に述べていないが、ここで接中されている形式のカイロ・アラビア語におけるルドリング素 *-tinV-* (Burling 1970)との類似は興味深い。

[22] 類例として、コンゴ東部のブカヴではスワヒリ語ルドリングから *Kibalele* と呼ばれるより自律的かつ複雑な構造と明確な使用目的をもつ「秘密語」への発達が報告されている (Goyvaerts 1996)。

5　まとめ

本稿では、南スーダンの 10 代の小学生間において流行しているジュバ・アラビア語ルドリングについて記述した。また、このルドリングには出身都市 (ジュバかハルツームか) により異なる変種があり、時系列的にはハルツーム型のものがジュバ型のものに先行して存在した可能性を指摘した。

ジュバ・アラビア語プロソディ体系については、以下のような分析を行いうることが示唆された (2.3 節)。これらの発見は、Nakao (in print) を見直し、より包括的なジュバ・アラビア語プロソディ体系を再考する上で重要な手がかりとなりうる。

(17) a. 語末音節での H と F の対立に関し、H を境界トーン (H%)、F を卓立 (H*) + 境界トーン (L%) とする分析は、少なくともルドリングの音韻派生からは不適切と考えられる。本稿では、暫定的に、両方に対して H* が付与されており、L% が実現するか否かは多重連結を許すか許さないかの対立であると分析した。

b. ルドリング化は PAW の語形成の後、かつ境界トーン付与の前の音韻派生段階において行われていると考えられる。

c. ルドリング化が行われる音韻派生段階においては、PAW と TW のプロソディの振る舞いは中和していると考えられる。

また、ジュバ・アラビア語ルドリングを分析したことで、従来のルドリング類型論に対して、以下のような評価を行うことができた。

(18) a. Yu (2008) ほかは、反復コピー型ルドリングにおける母音のコピーは、韻律構造からの要請であると分析しているが、ジュバ・アラビア語ルドリングは少なくとも現時点ではこのように分析できない。(3.2 節)

b. Guimarães & Nevins (2012) や Frazier & Kirchner (2011) はルドリングは表層表示から派生する傾向があると分析しているが、ジュバ・アラビア語のルドリング化は (17b) の段階で生じている。このことは、ルドリングは音韻派生段階ごとに類型化できる可能性を示唆している。(3.2 節)

c. 反復コピー型ルドリングにおいて出現する入力外の分節音に関して、ジュバ・アラビア語は例外的といえる。ただし、これは伝播に起因する例外であり、純粋な言語普遍性の課題として扱う必要はない。(4.1 節)

なお、本稿ではジュバ型ルドリングにおける母音のコピーに関する音韻派生、ハルツーム型ルドリングにおける音韻派生は十分扱わなかった。今後、これら 2 変種に関しては、エリシテーションに基づくデータを収集することで、包括的な分析枠組みを構築することを課題としたい。

参考文献

Abu-Abbas, Khaled H., Thaer T. Al-Kadi, Feda Y. Al-Tamimi (2010) “On Three -rb- Language Games in Arabic” *Argumentum* 6: 76–90.

Bagemihl, Bruce (1989) “The Crossing Constraint and ‘Backwards Languages’” *Natural Language and Linguistic Theory* 7: 481–549.

Bagemihl, Bruce (1995) “Language Games and Related Areas” In John A. Goldsmith (ed.) *The Handbook of Phonological Theory*. Cambridge: Blackwell, pp. 697–712.

Bakalla, Muhammad H. (2002) “What is a Secret Language? A Case from a Saudi Arabian Dialect” in Dilworth B. Parkinson & Elabbas Binmamoun (eds.) *Perspectives on Arabic Linguistics XIII-XIV*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 171–183.

Botne, Robert & Stuart Davis (2000) “Language Games, Segment Imposition, and the Syllable” *Studies in Language* 24 (2): 319–344.

Burling, Robbins (1970) *Man’s Many Voices*. New York: Holt, Rinehart, and Winston Inc.

Demolin, Didier (1991) “L’analyse des segments, de la syllable et des tons dans un jeu de langage mangbetu” *Langages* 25 (101): 30–50.

Evans-Prichard, Edward E. (1954) “A Zande Slang Language” *Man* 54: 185–186.

Frazier, Melissa & Jesse S. Kirchner (2011) “Correspondence and Reduplication in Language Play: Evidence from Tigrinya and Ludling Typology” ms. (www.melfraz.com, 閲覧日 2013.2.7.)

Goyvaerts, Didier L. (1996) “Kibalele: Form and Function of a Secret Language in Bukavu (Zaire)” *Journal of Pragmatics* 25: 123–143.

Guimarães, Maximiliano & Andrew Nevins (2012) “Opaque Nasalization in Ludlings and the Preccedence Relation of Reduplication and Infixation” *Letras & Letras* 28 (1): 129–166.

Kenyon, Susan (2011) “Spirits and Slaves in Central Sudan” in Andrew Dawson (ed.) *Summoning the Spirits: Possession and Invocation in Contemporary Religion*. London & New York: I. B. Tauris, pp. 58–73.

Laycock, Don (1972) “Towards a Typology of Ludlings, or Play-Languages” *Language Communications* 6: 61–113.

Manfredi, Stefano (2008) “Rendók: A Youth Secret Language in Sudan” *Estudios de dialectología norteafricana y andalusí* 12: 113–129.

McCarthy, John (1991) “L’infixation réduplicative dans les langages secrets” *Langages* 25 (101): 11–29.

Miller, Catherine (2004) “Un parler ‘argotique’ à Juba, Sud Soudan” in Dominique Caubet et al. (eds.) *Parlers jeunes ici et la-bàs*. Paris: L’Harmattan, pp. 69–90.

仲尾周一郎 (2011)「現代若年層ジュバ・アラビア語についての予備的報告」『地球研言語記述論集』3: 59–83.

――― (2012)「ディアスポラの南部スーダン・アラビア語―オーストラリアにおける現状と言語政策―」『地球研言語記述論集』4: 101–121.

Nakao, Shuichiro (in print) “Prosody of Juba Arabic: Split Prosody, Morphophonology, and Slang” in Mena Lafkioui (ed.) *African Arabic: Approaches to Dialectology*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Raimy, Eric (2000) *The Phonology and Morphology of Reduplication*. Berlin: Mouton de Gruyter.

千田俊太郎 (2010)「麻雀ジャーゴン試論―麻雀ジャーゴン記述と社會方言、集團語の一般論に對する問題提起」『日本語研究センター報告』(大阪樟蔭女子大学) 16: 15–36.

Vaux, Bert (2012) “Language Games” in John Goldsmith, Jason Riggle & Alan C. L. Yu (eds.) *The Handbook of Phonological Theory*. Chichester: Blackwell, pp. 722–750.

Vycichl, Werner (1959) “A Forgotten Secret Language of the ʿAbbādi Sheikhs” *Kush* 7: 222–223.

Walter, Mary A. (2002) “Kalaam, Kalaarbaam: An Arabic Speech Disguise in Hadramaut” *Texas Linguistic Forum* 45: 177–186.

Yu, Alan C. L. (2008) “On Iterative Infixation” in Hannah J. Haynie & Charles B. Chang (eds.) *Proceedings of the 26th West Coast Conference on Formal Linguistics*. Somerville: Cascadilla Proceedings Project, pp. 516–524.

略号一覧

1: 一人称, 2: 二人称, 3: 三人称, ALL: 方向格前置詞, COMP: 補文標識, COP: コピュラ, DEF: 定冠詞, DEM: 指示詞, F: 女性, GER: 動名詞, IMPF: 未完了, LOC: 位格前置詞, M: 男性, PL: 複数, POSS: 所有, SG: 単数, TAM: テンス・アスペクト・モダリティ標識